折々の記 第324号　死語から見える現代の世相
（消えた言葉と、やわらかくなった社会）　令和８年１０月２２日記

１　はじめに　執筆に寄せて――ある「気づき」から

前号（第323号）において、私は「愛の鞭」という言葉を補助線に、指導の場から正当な厳しさが失われつつある現状と、その背景にある指導者の逡巡や組織の萎縮について論じた。

ＨＰアップ後、その論考を思い返していたとき、ふとした思いつきが頭をよぎった。「愛の鞭」に限らず、かつて私たちが日常で当たり前のように使い、あるいは社会の規範として機能していた言葉の中で、いつの間にか影を潜めてしまったものが他にも数多く存在するのではないか、という気づきである。

ためしに思いつくまま、「死語」となった、あるいは死語になりつつある言葉を紙に書き出してみた。「良妻賢母」「愛国心」「新聞少年」「男らしさ・女らしさ」「２４時間戦えますか」「根性」「お説教」……。

分野を問わず集めてみると、五十を超える言葉があっという間にリストアップされた。そして、それらの言葉を一俯瞰したとき、単なる時代の流行り廃りを超えた、ひとつの明確な「世相の輪郭」がくっきりと浮かび上がってきたのである。それは、日本社会が急速に「摩擦を避け、優しさに満ち溢れ、マイルド（中性的）な方向へと傾斜している」という紛れもない事実であった。

結末をあらかじめ用意して考え始めたわけではない。しかし、消えゆく言葉たちの残像を追うことで、私たちがどのような社会を選び取り、同時に何を失いつつあるのかが、より鮮明に見えてくるように思えたのである。本号では、この「死語の採集」から見えてきた現代社会の地殻変動について、総括的に論じてみたい。

２　言葉の「化石」が語る時代の地殻変動

言葉は社会の空気を映し出す最も過敏な感応体である。時代とともに新しい言葉が生まれ、古い言葉が消えていくのは世の常だが、時として特定の言葉が一斉に姿を消し、あるいは「使ってはならない禁句」へと変わっていく現象に立ち会うことがある。

「良妻賢母」「滅私奉公」「根性」「男らしさ・女らしさ」「お説教」「２４時間戦えますか」。

かつて日本人の価値観や日常の立ち振る舞い、組織や家庭における道徳的規範を強力に規定していたこれらの言葉は、2000年代以降のわずか四半世紀ほどの間に、急速に日常から姿を消した。あるいは、口にすること自体がリスクを伴う「時代錯誤の化石」のような扱いを受けるに至っている。

単なる流行語の廃れとは異なり、こうした語彙の消滅は、日本社会を根底で支えていた価値規範そのものが大きな地殻変動を起こしたことを物語っている。前号で論じた「正当な厳しさの失効」もまた、このより大きな言語的・文化的な地殻変動の一環として捉え直すことができるだろう。

３　消えた語彙の三つの構造変化

2000年以降に衰退・消滅した言葉たちを分類してみると、日本社会が推し進めてきた構造変化の選択がくっきりと浮かび上がる。そこには大きく分けて三つの潮流が存在する。

（１）　固定的な役割意識と「ジェンダー規範」の崩壊

第一に、「良妻賢母」「亭主関白」「花嫁修業」「内助の功」「ＯＬ（オフィスティ

レディ)」「腰掛け就職」といった、性別や立場に基づく役割分担を前提とした言葉の消滅である。

かつては「男らしさ」「女らしさ」という言葉が、それぞれの性別における美徳や責任を補強するフレームワークとして機能していた。しかし、個人の自由と尊厳、ジェンダー平等の概念が定着するにつれ、こうした規範は「強制的な偏見」として排除されるようになった。これは、一人ひとりが性別にとらわれず自分らしく生きる権利を獲得したという意味で、社会の疑いようのない進歩である。

（2）　「集団のための自己犠牲」と滅私奉公の拒絶

第二に、「滅私奉公」「モーレツ社員」「２４時間戦えますか」「身を粉にして働く」「社用族」といった、組織や集団のために個人を犠牲にすることを求める言葉の一掃である。

昭和から平成初期にかけての日本型雇用システムは、個人の生活や感情を脇に置き、会社への忠誠と猛烈な労働とを引き換えに、終身雇用の安心を与えるという暗黙の契約の上に成り立っていた。しかし、バブル崩壊後の構造改革、働き方改革、ワークライフバランスの浸透を経て、こうした「滅私の美学」は一変して「ブラックな労働搾取」とみなされるようになった。

（3）　「精神論的抑圧」と厳しい指導の忌避

第三に、「根性」「気合」「お説教」「しつけ」「落ちこぼれ」といった、過酷な状況への耐性や上下関係を通じた指導を要求する言葉の回避である。

かつては精神力を無条件に美化し、厳しい注意や叱責によって人を鍛え上げることが一般に行われていた。しかし、ハラスメントに対する警戒感の高まりとともに、こうした精神論や一方的な指導は、個人の尊厳を害する危険な行為として急速に避けられるようになった。

4　「やわらかさ」と「中性化」に向かう日本社会

これらの言葉の消失プロセス全体を貫いている共通のベクトル、それは「社会の徹底的なマイルド化（中性化)」である。

角を立てず、他者の領域に過度に踏み込まず、不快感やハレーションを徹底的に排除する。ハラスメントを未然に防ぎ、誰も傷つけず、誰からも咎められない安全な距離感を保つ。こうした「やわらかさ」や「配慮」が、現代社会における最優先の倫理となった。

その結果、かつての男社会に特有であった強権的な圧迫感や、過剰な精神論による不合理な縛りは大きく後退した。弱者やマイノリティの権利が守られ、誰もが息のしやすい「優しい社会」へと移行してきたことは、大きな社会的成果と言ってよい。

しかし、その一方で、どこか社会全体の体温が下がり、かつて存在した猛々しさや、泥臭い連帯感、厳しさの中から生まれる力強いエネルギーのようなものが急速に失われていったという感覚を抱くのもまた事実である。社会が「女性的・マイルド」になり、尖ったものや強いものを一律に平準化していく空気の中で、私たちは何か大切なものを一緒に削ぎ落としてはいないだろうか。

5　言葉を失うことで、手放してしまったもの

ある言葉が使われなくなるということは、単に表現が言い換えられたにとどまらない。その言葉が保持していた「積極的な意味合いや機能」まで、社会から消失してしまう危険を孕んでいる。

たとえば、「お説教」や「しつけ」という言葉が忌避されるようになった結果、目上

の者が責任を持って若者を諭し、耳の痛い真実を伝える行為そのものが萎縮してしまった（これは前号で述べた「叱る責任の放棄」に他ならない)。

「根性」や「気合」という言葉が精神論として失笑される中で、困難にぶつかったときに歯を食いしばって耐え抜く粘り強さや、自我を粘土のように鍛え直す強靭さを、どのように次代へ伝えるべきかが宙に浮いている。

さらに、「世間体」や「近所付き合い」「会社の付き合い」といった鬱陶しい人間関係の排除は、個人の気楽さをもたらした反面、人間同士を結びつける強い絆や相互扶助の基盤を壊し、深刻な孤立や無関心を生み出す要因ともなっている。

不当な抑圧や理不尽な強制を排除しようとするあまり、人間が成長し、社会がまとまりを保つために必要であった「正当な規律」や「鍛錬の機会」まで投げ捨ててしまったのだとすれば、それはあまりにも大きな代償と言わざるを得ない。

6　真の成熟とは「無菌室」の先にある

時代の変化とともに言葉が移り変わり、社会が過度な威圧性を脱して優しく配慮に満ちたものになること自体は、決して悪いことではない。過去の強権的な時代に戻るべきだと主張したいわけでもない。

しかし、ただ摩擦を恐れて言葉を削ぎ落とし、傷つかない・傷つけない「無菌室」のような安全さの中に閉じこもるだけでは、社会の本当の成熟とは言えないだろう。

真の成熟とは、かつての「無遠慮な厳しさ」に逆戻りすることでも、現在の「無責任な優しさ」に逃げ込むことでもない。消えゆく死語を単なるノスタルジーとして懐かしむのでもなく、かといって「昔は野蛮だった」と一蹴するのでもなく、**「なぜその言葉が不要とされたのか」を冷徹に吟味しつつ、「その言葉が担っていた本来の肯定的な役割を、別の形でどう引き継ぐか」を模索すること**である。

「男らしさ」「女らしさ」という言葉を使わなくとも、人間としての誠実さや毅然とした強さをいかに育てるか。「２４時間戦えますか」という猛烈さを否定しつつも、自分の仕事に情熱と責任を注ぐ覚悟をいかに持てるか。「お説教」という言葉を排しながらも、相手の将来を思って真剣に向き合う情熱をいかに保てるか。

極端から極端へと振れやすい日本社会だからこそ、一方向に流れる時代の空気に立ち止めをかけ、言葉の奥にある「本質」を見極めなければならない。消えた言葉たちが残した静寂の中で、私たちは今、自らの言葉と責任で、新しい「人間の鍛え方」と「成熟した関係性」を問い直す局面を迎えているのである。

（了）